渋沢栄一の生き方（２）

１　倒幕から幕臣へ

文久４（1864）年、栄一は京都に来てはみたものの、生計を立てるめどがついていませんでした。そこで、かねてより懇意にしていた一橋家の重臣、平岡円四郎の誘いをうけて、一橋慶喜（後の 15 代将軍徳川慶喜）に仕官することになりました。栄一は、農民から武士になったのです。そして、当主である一橋慶喜への謁見を平岡に頼みこみ、土下座しながらも遠慮なく意見を述べました。「徳川家とともに一橋家が共倒れしないために、幕府を倒そうとしている者を集めて一橋家に集めれば、いずれ天下を治めることができます」と栄一は提案します。慶喜は意外にもこの意見に賛成しました。慶喜の意を受けた栄一は、江戸と一橋家の領地内を歩き回り、歩兵増強のための募兵で成果を出しました。さらには、一橋家の財政危機の改革を担当し、酒屋に年貢米を酒米として大量に売りさばいて多くの利益をあげたり、白木綿や火薬のもととなる硝酸を売るなどの新しい事業を行うことで、一橋家の財政再建に大きく貢献しました。

このように栄一が一橋家における地位を確実なものとしていく中、慶應 ２（1866）年、当主の一橋慶喜は徳川 15 代将軍となりました。栄一は幕臣に取り立てられ、陸軍奉行支配調役という陸軍奉行の書記官の役目を与えられました。

武士になった渋沢栄一
渋沢史料館所蔵

２　ヨーロッパへ派遣

慶應３（1867）年、栄一は、第 15 代将軍徳川慶喜の弟、徳川昭武（14 歳）に随行して、ナポレオン３世が主催するフランス・パリの世界大博覧会を観覧しました。このヨーロッパ滞在中に栄一は、ちょんまげを切り、洋装に変え、議会、取引所、銀行、会社、織物工場や機械工場、病院、上下水道、ガス灯、鉄の馬（鉄道）や海運業などを見学しました。進んだヨーロッパ文明やそれを可能にする資本主義のシステムに驚くとともに、身分差のない平等な社会に感銘を受けました。栄一の印象に特に強く残ったことは３つあったようです。

１つ目は、ベルギー国王レオポルト２世に謁見した際、日本はベルギーの鉄を使ってはどうかと国王が自ら商売に関与していこと。

２つ目は、商工業者と軍人という民と官が尊卑や上下の感覚なく接していること。

３つ目は、銀行の仕組みを学んだり、株式と公債を体験したこと。ブルース（証券取引所）で政府公債と鉄道社債を買い入れた際に、栄一自身も鉄道社債で大金を得ることができたこと。

このヨーロッパ視察が、栄一の人生を大きく変えていくことになります。

シルクハット姿の栄一（渋沢史料館所蔵）

パリ万博幕府使節団一行（渋沢史料館所蔵）

渋沢史料館様から貴重な写真のご提供をいただきました。誠にありがとうございました。記して感謝申しあげます。